

報 告 書

令和5年2月28日

座間市議会議長

荻原健司 殿

ざま大志会 団長 沖本浩二
松橋淳郎
川崎高一
美濃口集

次のとおり報告します。

- 1 視察日時 令和5年1月26日（木）～27日（金）
- 2 視察先
 - （1）長崎県大村市
 - （2）長崎県諫早市
- 3 視察項目
 - （1）こども未来館「おむらんど」について
 - （2）スポーツ振興によるまちづくりについて
- 4 概 要 別紙のとおり

令和5年2月6日

座間市議会議長

荻原健司 殿

ざま大志会

沖本浩二

視察所感

(1) こども未来館「おむらんど」について

大村市の地域子育て支援センターである、こども未来館「おむらんど」は元々商業施設だった建物を利用して整備されたものであり、本市の近隣自治体では厚木市が同様の取り組みを行っている。おむらんどの近年の年間利用者数は令和元年度が約5万5千人、令和2年度が約8千人、令和3年度は1万1千人と、やはり新型コロナウイルス感染症拡大の影響は大きい。

利用者数の推移はさておき、市民評価は極めて高く、開設された平成26年11月から、今現在までの成果として挙げられるのは、何と云っても子育て世帯の大村市への転入に繋がっていることだ。アンケートを年1回実施しており、市民ニーズを的確に捉え、事業改善に努められている。

新しい“ハコモノ”を造るのは時代に逆流する。本市としても市長のスローガンである「子育てに『やさしい』座間へ」を目指し、大型商業施設や大型倉庫施設に空きスペースがあれば、それらを積極的に活用した子育て支援センターの設立を考えても良いのではないかと感じるものでした。

(2) スポーツ振興によるまちづくりについて

諫早市は長崎県の中央部に位置し、人口で見れば座間市と同水準となる約13万人だが、総面積は341.797㎏であり座間市の約1.9倍の広さとなっている。平成17年3月に合併され新しい諫早市が誕生し、合併前のそれぞれの町に所在されていた教育施設や歴史文化施設、スポーツ施設の整備を行っている。市内にある34ものスポーツ施設は、元々各町にあった施設が活かされている。諫早市における「スポーツ振興によるまちづくり」の経緯はこうした背景から培われたものともいえる。上記のように恵まれた環境の中で、所管部署であるスポーツ課が主となり、スポーツに係る様々な事業を展開されている。また、商工観光課によるスポーツ施設を活かした合宿や会議等の誘致など、観光事業としての取り組みも行われている。課題としては施設の利用料金を現金で取り扱いを改善することや、ナイター設備を整備することなどが挙げられていた。うらやましい施設環境であるが故の課題しかり、

諸事業を担当されているスポーツ課の業務量は計り知れないが、スポーツ振興に積極的な姿勢で取り組んでおられる。上を見ればきりが無い。本市としては限られた施設を活かしながら市民ニーズに応じていくかが課題であり、本市のあるべきスポーツ振興の姿を構築させたいと感じた。

令和5年1月30日

座間市議会議長

荻原 健 司 殿

ざま大志会

松 橋 淳 郎

視察所感

(1) こども未来館「おむらんど」について

長崎県大村市は、世界初の海上空港で知られている大村湾に浮かぶ『長崎空港』の対岸に行政区があり、長崎県の空の玄関口であります。市の面積は、約126km²。（座間市の約7.5倍）人口は約98,000人と座間市より約3万人少ないが、長崎県で第4番目の人口を有しています。また、財政に目を向けますと、令和4年度の一般会計補正予算額は約420億円と座間市と肩を並べる額であります。この大村市の特徴としては、座間市と同様、人口が減少していないという面からも魅力を感じる市であります。（※長崎県で唯一人口が増加している）大村市の令和2年度出生率は1.75と高い率で推移していますが、18歳未満の児童数は1学年あたり1,000人と横ばいとなっており、緩やかに少子化に進んでいるのが現状とのことです。

そんな大村市では、こども行政で前向きかつユニークな取り組みを行っていました。今回訪問した大村市では、座間市と同様、機構組織の中で、独自の部局『こども未来部』を設置しており、部局では、2つの『こども政策課』と『こども家庭課』のセクションに分けられています。研修においては、こども政策課の課長をはじめ『政策グループ』『教育・保育グループ』の4名の職員さんがこども行政に対する、訪問先である大村市の取り組みについて親身になり説明をいただきました。

今回、訪問させて頂いた目的のひとつ『おむらんど』とは、大村駅前商店街の一角にあり、平成26年に、旧銀行地であった土地、建物を買い取り、市民交流プラザとして開館した4階建てのビル施設内にある『子育て支援施設』であります。建物は既存施設であるが、1階スペースの会議室は、銀座のアトリエを彷彿させるガラス張りのファッショナブルな空間であり、訪問時もレンタル・スペースにて利用者が多く見受けられる。また、4階の子育て支援センター『おむらんど』は、面積約392m²、小学校の25mプール（375m²）より広いスペースを3つのゾーンに分け2歳未満の親子がゆったり遊べるスペースから、ふわふわマットをはじめとしたボールプールで思いっきり体を動かせる遊具が充実したスペース、また、あかちゃんコーナーもあり訪問時も、コロナ対策で時間制限を行う中で、子育て親子の交流の場の提供と交流の促進が行われていました。3階には、こども支援センター事務所が

設置され、経験豊富な保育専門スタッフによる個別相談が行われています。1階レンタル会議室スペース、2階多目的ホール（コンサートやイベントが開催）3階こども未来館（談話室）、こども支援センター（事務所・こども相談にも応じる）4階あかちゃん広場、にこにこ広場（ボールプール、木登りコーナー他） 建築物の買い取り額（約16億円）『おむらんど』の整備費については、整備業務委託：約3600万円（内装の変更や遊具設置等）またソフト面では、座間市の庁舎2階で行っている妊婦期から子育て期まで切れ目ない支援を行う事業『ネウボラざまりん』と同様の取り組みを、大村市では、0歳から18歳未満のすべてのこどもに関する支援『出会いから妊娠、出産、子育てまで』切れ目ない支援として、訪問した『おむらんど』で実施他、長崎空港からほど近い市役所、また、大村駅前にある『大村市こどもセンター』を拠点に行っており市内連携において母子保健や障害福祉、また市外からの移住促進所管課と連携し保健師の専門的助言、発達支援、移住希望者の見学等を実施しているとのことでした。また、「おむらんど」のコロナ禍前の令和元年の年間利用者数は1万1千703名であり、座間市でプレイルームや赤ちゃんルームを備えた、小田急相模原駅前の第二子育てセンター「ざまりんの家ひまわり」の利用者数の3倍以上の利用者数があり、子育て世代の皆様へのPRとして、市の広報やホームページのみではなく、こども未来部独自でアカウントを持ったインスタグラムなどの発信が好評とのこと市内の利用者のみではなく、利用者の半数が市外の方々に、子育て世帯の移住相談者の見学や大村市への転入の一要因になっているとのこと。今回、職員の皆様とのお話合いのなかでハード面、ソフト面、サービス面とバランスの取れた、こども支援事業を学ばせて頂きました。

最後に、大村市の特色のある取組をご紹介します。

- ◎こどもセンター（駅前商店街内）
- ◎第2子目保育料無償化
- ◎保育士就職祝い金支給
- ◎4歳児検診の実施
- ◎児童虐待対応専門室
- ◎婚活サポートセンター
- ◎こども第三の居場所

(2) スポーツ振興によるまちづくりについて

長崎県諫早市は、大村湾、有明湾、橘湾の3つの海に囲まれた、長崎県の中央に位置する市。平成15年に、1市5町が合併した新しい市であります。市の面積は約342㎢と、座間市の面積の約20倍の広さを誇る中人口は、13万2,375人（令和4年12月1日）とほぼ、座間市と同規模であり県内において、長崎市、佐世保市に次いで第3位の人口となっております。

今回の研修では、諫早市経済交流部・スポーツ振興課課長をはじめ3名の職員の皆様に「スポーツ振興によるまちづくり」について、意見交換をさせて頂きました。諫早市では、「スポーツ振興」に関する理念は、「ひとが輝く創造都市」と題し、総合計画の中で「スポーツ振興」を掲げており、他市と同様に健康づくりの一環としての「スポーツ振興」のみで

はなく、「地域づくりを活かした観光・物産」として、スポーツを「交流促進による地域活性化」と位置付けているところが特徴です。

スポーツによる交流促進では、①スポーツの拠点施設の整備②生涯スポーツの振興③スポーツツーリズムによる交流人口を掲げており、機構改革が行われたばかりで、経済交流部の中の「スポーツ振興課」職員7名（課長含む）で主に以下4つの業務に取り組んでいます。①スポーツの普及振興②社会体育の振興③体育関係団体の指導育成④体育施設の設置管理を行っています。私が今回の視察の中で、最も関心をもったものは、④の「体育施設の設置管理」であります。

市内には、34の施設があり以下施設の概要であります。

体育館（3） 武道館（4） 多目的グラウンド（11） テニス場（3） 相撲場（4）
弓道場（1） プール施設（1） ゲートボール場（1） サッカー専門競技場（2）
野球専用グラウンド（2） スケートボード場（1）

以上が人工的なスポーツ施設の概要であるが、一方、諫早市は、大村湾、有明海、橘湾3つの海に囲まれた地形を活用したスポーツ施設の活用の取り組みが、他市にはできないユニークなオンリーワンの取り組みとして感銘を受けました。飯盛地区の「結い浜マリパーク」では、海水浴場でのビーチバレーやビーチサッカー。諫早湾の「雲仙多良シーライン」では、一直線に伸びる堤防を活用し長距離ランナーやサイクリストのトレーニングとして、高来地区では、コスモス畑の景観を活用した2.2kmのクロスカントリーコース。さらには、市内を流れる一級河川（本明川）を活用したボート練習場等。市内利用者のみではなく、全国各地からスポーツ施設を利用するために諫早市へ訪問されるとの事で、受け入れのための合宿施設も充実しており、まさに総合計画の「スポーツツーリズムによる交流人口の拡大」を無限の可能性で実施していることが伺えました。

研修中での意見交換では、なぜ諫早市では、これだけ多くの「スポーツ施設」を設置することができたのか。との質問に対し、平成15年の1町5町の合併において、合併以前、1町5町にて、各々のスポーツが盛んで、施設を自治体で運営をしており、合併により、1市で数多くのスポーツ施設を維持運営していく方向になったとの明確な説明がありました。また、スポーツ振興課の担当職員からは、維持管理にあたる職員の数、施設の老朽化による維持管理など多くの問題も抱えているとの説明もありました。研修を終え、自然環境を活用したスポーツ振興など、座間市においても新宿地域および駅前商店会などでも、アイデアと工夫で行えるスポーツ振興もあるのではないかと、今後の可能性を見出して行きたいと思えます。

最後に諫早市がスポーツ振興として取り組む主な事業を紹介します。

◎V・ファーレン長崎ホームタウン事業

諫早市をホームタウンとするプロサッカーチームのJリーグ活動を活用し、スポーツ振興や交流拡大による地域活性化を図る事業（令和3年度事業決算6,592千円）

◎プロスポーツ連携・交流事業

こども達がプロスポーツ選手等のプレーを「見る」「触れる」ことにより、青少年へのスポーツの普及や健全育成の拡大を図る事業（令和4年度予算額1,500千円）

◎本明川（一級河川）ボートコース活用促進事業

本明川下流域におけるボートコースは、全国でも有数のポテンシャルを有すると評価を受けておりボート競技の合宿等を誘致推進することにより、スポーツツーリズムおよび交流人口の拡大を推進する事業（令和3年度事業決算2,222千円）

◎宿泊観光促進事業

市内宿泊に伴うスポーツ大会や合宿、コンベンション等を開催する主催者に対し、助成金を交付し支援、宿泊客の増加に伴う交流人口の拡大および地域経済の活性化を図り、観光消費額及び観光客数の増加を目指す事業（令和3年度事業決算3,100千円 宿泊延数3,513人）

これらの事業は一部抜粋となります。

令和5年2月6日

座間市議会議長

荻原健司 殿

ざま大志会

川崎 高一

視察所感

(1) こども未来館「おむらんど」について

大村市のこども未来館「おむらんど」は、平成26年に、子育てのストレス軽減や育児不安の解消を図り、地域の子育て支援の向上を目的としてこれまでの市内子育て支援機能を効率的に再編整備するために大村市民交流プラザの中に開設された。新型コロナウイルスの影響で利用者数はかなり減少したが、市外の利用者も多く、子育て世帯の大村市転入の一因となっている。大村市としての子育て問題や課題について伺ったところ、本市と同様に待機児童対策であり、保育士の確保や負担軽減等を挙げられていたが取り組みとして、市外から転入して働く保育士に就職祝い金を支給しているとのことであった。「おむらんど」の市民からの評価は大変高く、視察中も多くの利用者が見られた。

九州地方だけでなく地方からの人口流出は大きな問題である。子育てなどの制度面の充実をしなければ根本的に人口問題の解決にはつながらない。大村市の取り組みは人口減少に資する方法として本市としても学ぶべきところがあると感じた。

(2) スポーツ振興によるまちづくりについて（諫早市）

諫早市は平成17年に1市5町が合併し現在に至っている。そのため、各市や町のスポーツ施設がそのまま残り、現在では34ヶ所になっている。スポーツ施設の利用者は令和3年度では県外市外を含めて約55万人を数える。また、諫早湾干拓事業で本明川に5キロメートルの水路ができ国内屈指のボート競技場となっている。これらのスポーツ施設を資源として積極的に活用し、また、新しくスポーツ施設をつくり県外からコンベンションを誘致するなど商工観光課と一体となった取り組みを進めている。

市の中央体育館は諫早市出身の体操選手の内村航平さんからお名前を借り「内村記念アリーナ」となっている。本市でもアリーナに井上尚弥選手のお名前をお借りできればと考えるがプロ選手とアマチュア選手では立場が違うので難しいかもしれない。

施設を維持管理する上での問題点として施設の老朽化、職員の数、利用料金の時代にあった徴収方法（現在は現金受領のみ）、申し込み方法などは今後検討するとしていた。

また、市内に拠点を置く V・ファーレン長崎を応援し、プロスポーツ連携・交流事業を積極的に進め、青少年へのスポーツの普及や健全育成を目指すとしている。

本市とは環境や条件が違い、すぐに取り入れることは難しいと思われるが諫早市が問題点としていたところは似た部分があるので、本市のスポーツ施設利用の市民の利便性については今後考えていくことが必要と考える。

令和5年2月27日

座間市議会議長

荻原健司 殿

ざま大志会

美濃口 集

視察所感

(1) こども未来館「おむらんど」について

大村市は人口約9万8千人の市である。「おむらんど」は平成26年11月8日に開館している。建物は既存施設（プラザおおむら）であるため、整備については内装の変更や遊具設置等を業務委託している。運営については市の直営方式となっており、正規職員1名及び会計年度任用職員他9名の計10名で交代制によって運営している。（10名中6名が保育士）

「おむらんど」の事業内容は①子育て親子の交流の場の提供と交流の促進②子育て等に関する相談・援助の実施③地域の子育て関連情報の提供④子育て及び子育て支援に関する講習会等の実施⑤地域支援活動「おむらんど」は5つの事業内容があり、地域の子育て世代の憩いの場になっている。

「おむらんど」を開設したことによる市全体の変化について、市内の地域子育て支援センターの中核施設の役割を担い、大村市としての地域子育て支援の計画・調整をしている。新型コロナウイルス感染症の流行前は、利用者の約半数が市外の方で「おむらんど」の利用が子育て世帯が大村市に来る機会となっている。また、子育て世帯の移住相談者が「おむらんど」の見学に来ることがあり、「おむらんど」が子育て世帯の大村市転入の一要因となっている。

「おむらんど」は子育てしやすいまちの象徴とも言える施設となっているため、座間市においても、子育て世代が集まる憩いの場となる施設は必要だと感じた。

(2) スポーツ振興によるまちづくりについて

諫早市は重点プロジェクトとして7つのプロジェクトを掲げている。その中の一つが「スポーツのまち諫早の推進による交流促進」である。スポーツを通じた様々な事業に取り組み、スポーツ教室や大会の実施やプロスポーツ連携・交流事業、スポーツ意欲の高揚と競技力の向上、体育関係団体との連携強化、本明川ボートコースの活用促進などをスポーツ振興として取り組んでいる。

諫早市のスポーツ施設は34施設あり、スポーツ施設の整備、充実を図り、市民が安全、安心、快適にスポーツを楽しむ環境づくりを進めている。その中でもスポーツパークいさはやは、総事業費約52億8千万円をかけ、第1野球場、第2野球場、サッカー広場、スケートボード場の施設整備を行っている。

また、宿泊観光促進事業も行っており、市内宿泊を伴うスポーツ大会や合宿、コンベンション等を開催する主催者に対し、助成金を交付し支援することにより、宿泊客の増加に伴う交流人口の拡大及び地域経済の活性化を図り、観光消費額及び観光入込客数の増加を目指している。

このようにスポーツを通して様々な事業に取り組んでおり、地域活性化に繋げている。座間市においても更なるスポーツ施設の改善も含め検討が必要だと感じた。